

(二〇一四年) 新春に当たっての所感などを語って頂きました

順不同 敬称略

《サロン元年》



藤井 千恵子

「ジョン・ケージもそうで、音楽という音が消えて無音になったとき、耳を澄ませてみよ。
驚くべき豊かな音、たとえば風の音、虫の音、雑音、時には星の音などあらゆる音がこの世に満ち満ちていることに突然気がつく。それは音波としての特定の音ではないかもしれないが、音楽という人間の秩序と理性で作りに上げた音が一切なくなったときに、音楽を必死に、つまり音楽による存在世界を求めてる耳が必死に音を聞き取ろうとする、するとまさに宇宙全体がその音となる。ということを書いていきます。」

(栗田勇著より)

再生装置の設置を希望しながらも自分の弾く楽器の音の先にあるものを聴くことが好きで、ぐずぐずと先延ばしし自然や街の音を友としていました。
一年ほど前会員の皆様のおかげでやっとセッティング完了。今では各部屋にそれなりの音出機。今年は人工の街と自然の光を楽しみながら、そして時としては友人と共に喋りをしながら古今東西の楽器音を聴きたいと思っております。共感出来る方どうぞお好きなソフトをお持ちになって気まぐれオープンする「サロン・ド・CHICO」へお越し下さい。
CHICOはジャガイモに似た極甘の果実・小さい意。

《オーディオも十人十色》



新田 不二雄

私も、AAFCに入会して5年以上の歳月が流れる。
その間、ご好意により、いろいろな方のシステムを、聴かせていただいた。
システム構成はともかく、出てきた音にそれぞれ、オーディオに対する思いを、感じる事が出来たのは、大変幸せなことだと思っている。

私のシステムの音は、5年の間に調整の繰り返し。当クラブの方が、訪れるたびに、あつちにフラフラ、こつちにフラフラ。私自身も、不満があつたので、仕方がない。
音楽は、食事にたとえるなら、ラーメンの塩、味噌、醤油、なんて物ではなく食事全般。洋楽、和楽、ピアノ、バイオリン、ギター・・・
それぞれに対する思い入れは、人それぞれ。

昨年になってやっと、安心して聴ける音と巡り会えた。そうなると、人の意見が、あまり気にならない。フラフラしていたころは、人の同意を求めて、支えてほしかったのかもしれない。
オーディオの道は人それぞれ、私も、やっと見つけたその一本道を、これからは歩いていけそうです。

《新たな講座に向けて》



渡邊 豊治

昨年は県民(市民?)講座に通いました。色々な講座がありました。私はオペラ講座を選択しました。講座の趣旨は「興味を持ってクラシック音楽を楽しんでもらう」です。オペラ講座の内容は、オペラの歴史でオペラを鑑賞しながらの説明、その曲のできた社会的背景、作曲家の生涯等の講義を聞きました。
また講座終了時には、検定試験がありましたので、多少ですが緊張して講座を受講することができました。

さすがに試験勉強は五十年ぶり位でしたので殆ど、頭に入りません。色々なことを聞くのです。右の耳から左の耳に通過していくような状態です。自分の老化をしみじみと感じた経験でした。検定試験に合格しますと、賞状と二期会オペラのゲネプロ見学という景品が付いていましたので、何とか受かりたいと真面目にノートを取っていました。お陰様でゲネプロ「マクベス」を見ることができました。

オペラ講座で印象に残っていますのは、講座の中で「オペラ・スコアを讀んでみよう」という講義がありました。
指揮者が使用するフル・スコアを使用して、CDから曲を流しスコアを讀むのですが、初めてフル・スコアを前にして曲が流れてきても、なかなか付いていけず、すぐに迷子になってしまいました。
あまりの速さに目が回りそうでした。
使用した曲は、フィガロの結婚、マノンレスコー、カルメンの序曲、有名アリア等の一部分でしたが、指揮者のすこさを感じました。
すべての楽器に神経を行きわたらせて、曲を演奏して(作って)いく、大勢の演奏者を統率、意思疎通を図りながら。
難しい仕事だと感じましたが、指揮者の仕事は、老化によるボケはないだろうと、この年になると少しですが羨ましく思いました。

今年も、クラシック講座が取手で開催される予定です。(土浦の施設が工事のため一時間閉鎖予定のため)少し遠くなりますが、行きたいと思っています。
最後になりましたが、皆様のご健勝とご多幸をお祈りいたします。
本年もよろしくお願い申し上げます

《音楽の楽しみ方》



小林 延郎

物心ついたころの音楽といえば、父のギターを弾きながらの古賀メロディーであった。「湯の町エレジー」、「酒は涙か溜息か」、「影を慕いて」他：歌は決してうまいとは思わなかったが、音を外さずにギターを弾いていたように思う。

中学生頃からオーディオに興味を持ったが、経済的事情でハード・ソフトが十分揃わなかった。
その反動で会社に入って数年間、自分で稼いだ金は誰の許可も得る必要はなく自由に使い、しばらくは楽しくて仕方がなかった。麻雀、スキー、ゴルフなども結構まじめに行っていたが、オーディオ機器、及びソフトに収入の大半をつぎ込んだ。しかしながら二人一部屋の独身寮では機器の置き場、(特にスピーカー)に難儀し、秋葉原の試聴室のような音は得られなかった。

結婚して子供が生まれ、その後住宅ローンに苦しみ、オーディオとは決別したまま長らくきた。今さら投資をする意欲も薄れ、AAFCでかつて垂涎の的であったハード、及びメンバー自慢のソフトで今は満足している。

最近の楽しみ方は、名曲は例会、若しくはテレビの録画で聴き、そのほか図書館、レンタル、及びAAFCメンバーから借りたCDをパソコンに取り込み、六千円のDACキットで楽しんでいる。文字通り知足安分(足りるを知り、分に安ず)の境地である。